

復興塾通信

22号

2011年4月

嗚呼東北

小森 星児（復興塾塾長） <s-komori@maia.eonet.ne.jp>

東北地方というと、まずその広さに目を奪われる。近畿と中国を合わせても、面積では東北に及ばない。さらに、時間距離でも広さが実感できる。漸く青森まで新幹線が開通したが、着工から全通まで40年を要した鉄道路線はほかにない。

さて、広さとともにいわば末弟的な役割にも気付かざるを得ない。大震災以降、仙台で発行されている河北新報が便利なのでよく参照する。特に被災後1カ月は全紙面をPDFで公開し、テレビでは伝えられない現地の状況を詳しく報じて有難かった。

ところで、この社名の河北とはどの川を指しているのか、河西英通著『続・東北』（中公新書）で教えられるまで知らなかった。本書によると、河北新報の創設者一力健治郎は明治維新の東北征討に始まるとされる戯言『白河以北一山百文』に因んで万斛の憾みを込めて命名したという。平民首相原敬も逸山または一山と号したが、これも東北人らしい自己韜晦であろう。余分なことだが、東北6県には岩手県以外に首相を産した県はない。

確かに東北には、後進性、停滞性、辺境性を想起させる要素が多い。たとえば東北出身の有名人となると演歌歌手や相撲取の名前がすぐに浮かぶし、飢饉・凶作あるいは特異な民俗などもイメージ形成に一役買っている。石川啄木、宮沢賢治、藤澤周平、井上ひさしと書き継ぐと、通底する東北の風土が色濃く感じられよう。

風土性といえば、東北弁はその最たるものである。関西人と異なり、東北人は上京すると東北弁を棄てる。栃木県出身の私の父は家でも標準語で通していたが、草野心平や菅原克己など古い友人とは東北訛りで談笑していた記憶が蘇ってくる。他方、産業でも文化でも中枢を譲らなかつた関西人には、故佐治大阪商工会議所会頭の発言「東北は熊襲の産地、文化的水準もきわめて低い」は想定内であるに違いない。関西にも東北出身者は少なくないはずだが、避難者の居場所づくりで東北弁カフェを設置しようとしても適任者がみつからない。

さて、今回の大震災で驚いた発見の一つは、農漁業など食料生産基地に特化していると教えられてきた東北地方の産業が、自動車や半導体など先端産業にたいする部品供給基地として重要な役割を果たすところまで変貌を遂げていたことであった。思い返すと、この20年間、首都圏に立地している工場は、海外に移転するか東北に新たに拠点を設けるかの選択を強いられてきたといえよう。関西にいると、東京から先の動きはよく分からない。しかし、広い土地と豊富な労働力、さらに西日本に遅れて高速道路網が整備された東北が、新しい産業適地として浮かび上がった事情はよく分かる。

大震災による影響は免れなかったものの、基本的には内陸型である新しい工場の立ち直りにはそれほど障害がないと思われる。これに対し、津波で存立基盤が根底から揺らいだ農漁業の再建は極めて難しい。阪神大震災では、復旧と復興を区分けする単純な手法がそれなりの成果を収めた。第2次産業の場合、企業がいわゆる埋没費用を清算したお蔭で、新しい分野への転換が促進されたからである。

農漁業の場合は、農地や漁港を復旧したとしても、大震災以前にそれぞれの産業が抱えていた課題が解決されるわけではない。それどころか、個々の生産者が負担する設備施設の復旧には巨額の投資が必要になるので、高齢化が進んだ生産者がどれだけリスクを担うことができるか不安が残る。単なる復旧では、規模の拡大や若者の就業促進につながる可能性は薄い。

他方、敗戦や大災害を経験した国の方が、それ以外の国に比べてより高い経済成長を実現しているという報告もある。その原因が、非効率な産業の衰退と新産業の勃興をもたらす創造的破壊（シュンペーター）のプロセスにあるという指摘にも耳を傾けるべきであろう。もしその通りだとすれば、既得権にこだわる復興計画には、大きな期待を寄せるわけにはいかない。

復興塾・まち研メンバー紹介「群像6」

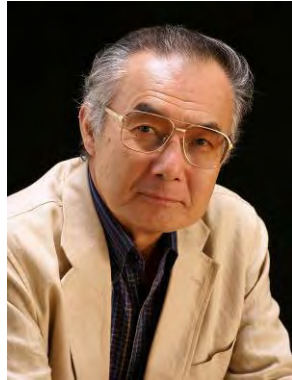
群像XX「住民自治へ理論と実践の日々」

松本 誠（市民まちづくり研究所）

<makoto@matsumoto2008.com>

神戸復興塾の草創期メンバーでありながら、最近はずっかりご無沙汰しています。

この半年近くは、明石市の“政変”へのアプローチから始まり、4月24日の市長選に至るまで8年ぶりに地元の市長選に没頭していました。選挙へ向けて新たに「明日の明石市政をつくる会」を立ち上げ、「市民がつくる市民の政策」である「市民マニフェスト」をつくり市民集会を重ねて、場合によっては独自候補も擁立する覚悟を定めて立候補予定者の公開討論会を開催したのが3月8日。討論会に出席しなかった県の天下り候補を「市長にふさわしくない×（バッテン）候補」と判定した後は、市民運動としてのネガティブ選挙運動を



展開していました。

結果は、市民マニフェストに賛同した47歳弁護士候補が69票差というきわどい勝利をおさめ、市民の主体的な選挙参画を訴えた運動も大きく寄与する結果となりました。今度は、選んだ側の責任をどう果たしていくか—という課題を背負って、市政と議会改革へまたのめり込んでいくことになりそうです。詳細は<http://akashi2011.com/> や私のHPをご確認ください。

8年前に新聞社を辞めてから、日常は関学大や桃山学院大、神戸学院大などの非常勤講師を務めながら、明石を中心に数多くの市民団体、NPO・NGOの活動三昧の日々です。今年からは復興塾の勉強家、大津俊雄先生の招きで神戸国際大学にも出講することになりました。

大学ではいずれも地方自治や市民の政治学、まちづくり学を講義していますが、共通する課題は市民主体のまちづくりと自治体改革にあります。地方分権を進める中で、住民自治をどう実体化していくか。武庫川流域委員会や明石、加西市政等への関わりも、理論と実践をどう一致させていくかの試みの一つだと思っています。

神戸復興塾と神戸まちづくり研究所の近況報告

3月11日に発生した東日本大震災により被災された皆様、そのご家族の方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々のご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。

阪神・淡路大震災を契機に結成された神戸復興塾そして神戸まちづくり研究所のメンバーは様々な形で皆様を支援するべく、小森塾長の声掛けのもと3月21日に「神戸復興塾 3.11 支援ネット」を立ち上げ毎月11日に定例会議を開催しています。5月11日にはメンバーによる『東日本大震災支援特別号』を発行予定です。

URL : <http://www.kobe-machiken.org/311shien/311shien.html>

◎パブリック・コメント提出

神戸まちづくり研究所のアドヴォカシー活動として以下を提出しました。

- ・神戸市環境基本計画(案)
- ・“こうべ”の市民福祉総合計画 2015(案)
- ・神戸市の市民福祉総合計画(案)
- ・神戸市都市計画マスタープラン(案)
- ・第8期県民生活審議会答申素案
- ・神戸市男女共同参画計画(第3次)(案)
- ・新ひょうご男女共同参画プラン 21(案)
- ・参画と協働の推進方策(案)
- ・新しい公共支援事業
- ・ひょうごツーリズム戦略(仮称)

寄稿No.1 『「初駒(スタジオ・カタリスト喫茶部)」開店!』

松原 永季 (スタジオ・カタリスト) <ekky@studiocatalyst.com>



平成 23 年 2 月 8 日、わが事務所、スタジオ・カタリストの土間部分に、喫茶部「初駒」をオープンしました。私はオーナー。店長は、事務所の位置する駒ヶ林町 1 丁目自治会の会長夫人、浦井さん。午前 10 時の開店少し前に訪れてきていただいた最初のお客さんは、お向かいのご夫婦・・・と思いきや、お二人は、わざわざ開店祝いを持ってきてくださったのでした。全く想定外でうろたえてしまい、お礼もしどろもどろに。その直後に来られたのは、ご近所の見知らぬ住人さん。神戸新聞に掲載された記事をご覧になったそうで、「ワシもなんかせんとあかんと思てな」と、いきなり横笛を高らかに吹いてくださる・・・。やや賑やかに、「初駒」はオープンを迎える事ができました。

「初駒」のある駒ヶ林は、神戸市長田区の南端、長田港に面しており、奈良～平安時代の遣唐船の船繋所であったと伝えられている、古くからあるまちです。大正～昭和の高度成長期に、工場労働者やサラリーマンが増え、漁業に携わる人は減ってきていますが、中央市場ができるまで、神戸の重要な漁港としての地位を誇っていました。路地が入り組んだ漁村集落の構成をよく残し、それゆえ木造家屋が密集したエリアとして位置づけられており、住民の減少、高齢化(約 40%)もあって、防災的にも課題の多い地区だといえます。

駒ヶ林の街区のど真ん中にある、この築 120 年以上の古民家は、事務所として使い始めるまで、

10 年以上空き家でした。私が細街路整備事業のコンサルタントとして、前の所有者の方に出会い、幾つかの段階を経て、結果として譲っていただくことになりました。以前から、仕事として古民家の再生に携わったことがあり、関心を持っていたのはもちろんですが、それと同時に、「まちづくりの現場に、当事者として関われる場所を持ちたい」との思いが強かったのです。まちづくりコンサルタントの仕事は、行政でも市民でもない、第三者としての位置づけを持って働く事が重要である事はいうまでもありませんが、震災復興の幾つかの事業に関わる中で、それだけでは腑に落ちない不満を抱えていたのです。それまで頭の中にもやややとあった、いろんなまちづくりに関わる事業を、具体的に実践できる場が必要だったのでした。



若干の改修は施されていたものの、建物は当初の姿をよく残していました。新たに作られた台所と茶の間を解体すると、比較的しっかりとした梁組が現われ、元あった土間空間が甦りました。そこに、村づくりでお手伝いしている地区の白職人さんの手になるケヤキのカウンターを据え、厨房機器も備え付けて、引っ越し後、約 2 年を経て、ようやく開店に到ったのでした。

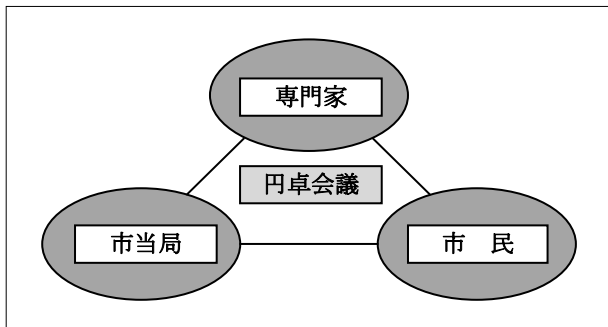
そして開店後 1 ヶ月・・・。オーナーの思惑を超えて、いろいろ起こるものです・・・。そんな結果は、また次回に!

寄稿No.2 『神戸→Muenchen→東北』

大津俊雄 (NPO 神戸まちづくり研究所理事、神戸復興塾委員長) <QWM10761@nifty.com>

阪神大震災で被災した夏に、私は^{ミュンヘン}Muenchener Forum (ミュンヘン市民討論会) を学びに現地に飛んだ。復興のお手本になるのはM市であろうと前から睨んでいたからだ。Forumの立役者^{クリュスピース}Kluehspies氏の家に泊めてもらい、4日に亘って市内を自転車^でで観察した。彼の重い経験から発する格言は多い。例えば「都市計画は社会哲学的な問題だ。都市計画とは車を流す事だと思われていたが、街中の道路を改善して交通問題を解決できた町は無い。」

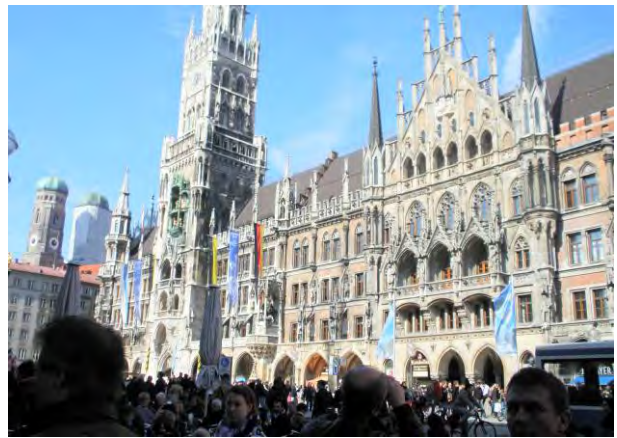
‘60年代は西ドイツも経済の高度成長期で、BMW本社のあるM市は市電を撤去して自動車道路を軸とした都市計画を打ち出した。市の職員でありながら反対を唱えたK氏は辞職して、市電に乗る運動やレール撤去反対デモを指揮して20年間戦った。その結果は原案の1/3が道路事業化され、1/3が地下化し、1/3が廃止されて保全や緑地化した。今や市民であふれる旧市街^{ブルグ}(Burg内)は、こうして車から守られて歩行者天国になったのである。市庁舎の広場は、私が45年前に来た時は市電・車・人で雑然としていたが、今は謝肉祭で仮装した男女の歌と踊りの場に化していた。観光客はのどかに仕掛け時計を見上げている。



Forumの構成図



大討論会風景 (右下司会者がK氏、リーフレットより)



市役所前の広場 (歩行者ゾーン)

交通改善の形態的成果なら、Seoul市の高速道路をはがして再生した清流づくり(裏ではバス体系の再編)、ブラジルの^{クリチバ}Curitiba市でのバス体系と公共施設の改善なども日本の交通関係者からは絶賛されている。しかしそこからは市民の声があまり聞こえてこない。K氏は困難なプロセスの中で、対立する行政と市民を話し合いに引き出し、そこに専門家を加えた円卓会議を作り、公開討論会を開いた。会合は小さい時には100人規模で、大きい問題では1万人規模に及んだ。これで行政は学んだ。「計画情報を早い段階から公開して、市民の意見を盛り込んで修正した方が、結局は事業がやり易い」と。市民も学んだ「意見を言う限りは、責任も分かち合わなければならない」と。専門家も「合理的に理屈ある話し合いをリードするべきだ」と悟った。これらは「当事者が早く参加すれば、問題点を早く知り、修正を加えて、事業全体をより良く短期に完成出来る」というコンセンサスに成長した。

このプロセスを経て関係者は、M市の道路計画の勝敗や形態よりも重要な「話し合いの場Forum」を勝ち得たのである。更にK氏はこの場を市内に於ける大型開発案件の全てを話し合うシステム「開発問題に関する市民討論機構」へと昇華して定着させた。既に新空港計画や郊外団地計画などで実績を上げている。このレベルにまで市民活動を高め得たのはM市以外ではStuttgart市(独)、Portland市(Oregon州)、San Francisco市など少数であろう。各市では学生の活躍やメディアの後押しがあった。EU憲章の「補完性の

原理」やドイツの「市民決定の法」は理論的環境を整えてくれた。これこそ私が追っかけている本物の市民参加である。

市民の声が弱い発展途上型開発では、^{テクノクラート}technocrat（技術官僚）によるトップダウン（いわば開発独裁）で都市インフラが整備され勝ちである。民の声が出てきた中進型開発では、市民に参加の手続きが用意されるが、公開説明会や対案具申で市民巻き込みを図る形式的参加に終わる場合が多い。先進型開発では、自立した市民と市行政の話し合う場が随時、更には恒常的に準備されている。

この点を他分野の知見を参考にして補足する（下表）。これによれば多様性ある 21C 都市の下では、課題も市民の考えも未知なため（クラスⅢ）、計画プロセスに利用者・市民を巻き込んで共に課題を発見し解決して行かざるを得ない。つまり ^{ガバメント}Government（統治）から ^{ガバナンス}Governance（協治）へと必然に移行していく。復興まちづくりはここに位置づけられよう。

神戸市の開発は「山を海へ」行かせ、マルク債決済で差益を上げて株式会社と自賛した。震災直後には市営空港を作ったが、市民 31 万人の反対署名を無視した。開発行政と市民の成熟度は先進型であったろうか？市民組織は復興を早く成し遂げたが、今はどれ程の力量を保ち、自立できているのか？震災の夏から Forum づくりを密かに期待して NPO で活動してきた私は、市民活動のブレイクスルーを求めて再度この 3 月に M 市を訪問したのであった。

しかし K 氏宅を出た直後に、とんでもないニュースが舞い込んできた。東日本大震災である。「君の国はもう危ないからドイツに留まれ」という友人の手を振り解いて帰国した。当初ドイツ人は災害で助け合う日本人に敬意を払っていた。しかし原発から放射能が出ているのに反対運動が起きない従順さに苛立ちを感じ始

めたようだ。「放射能は空気や魚で周辺諸国にも災難を及ぼす。助け合う内向き思考もいいが、災害多発の日本で原発を持つなら、人災事故に対して国際的責任を免れない」と諭された。「フクシマを制御できないと、日本人は流浪の民になるよ」とも警告された。

その後私は 4 月にリアス式海岸の多い岩手県を観察した。昭和 8 年の大津波の浸水域を田畑に変えて、家と役場を高台に移した大船渡市吉浜地区は今回の被災をまぬかれた。本郷地区は堤防の完成で安心して低い所に家を建てた部分だけが被災した。また 5 月には砂丘の後に平野が続く宮城県を観察した。仙台市荒浜地区では低い堤防を津波が簡単に乗り越えて、新興住宅地の生活を跡形もなく持ち去った。誰が宅地に許可したのか、開発行政に疑問を抱く。両県を概括して、歴史風土の知見を尊重しておれば「想定内」の人災であると感じた。

復興に向けて求められる態度は、細分された専門領域的分析（アナリシス）よりも、市民の知見も統合的に再編し実現するシステム（シンセシス）を、試行錯誤で早く構築することである。広域で多様かつクラスⅢの手法による復興まちづくりには、主旋律なきマーラーやジャズの演奏にも似た非指揮者たる手法が必要で、これは復興塾に集うプランナーこそが得意な分野である。私はその結果、各地区で楽しい Forum が成立することを再び期待したい。しかし時代は次の展開をしているようである。5 月の連休には国土交通省の若手官僚や東京のコンサルタントがこぞって被災都市を訪れて、様々な提案をしたと聞く。妙案には期待するが、その背後には中央大手の不動産や銀行の動きもある。この津波の引き波は、新たな脅威かもしれない。市民はこれに踏ん張れるであろうか。我々は地元にもっと寄り添って支えていこう。

人工物の研究開発論（新世紀工学シリーズ 4 「創発とマルチエージェントシステム」上田完次著編）参考

クラス	目的情報 (課題、要請)	環境情報 (自然、社会、過程)	都市・社会における開発の傾向と対象
I 完全問題	○ 十分	○ 十分	事前計画型、インフラ開発
II 不完全環境問題	○ 十分	× 不十分	既知課題へ市民と調整、都市再開発、復旧
III 不確定問題	× 不十分	× 不十分	課題の発見・解決の連結、復興まちづくり

喜多陽太郎君 弔辞

浦上 忠文（神戸市議員） <tadafumi@uragami.jp>

「喜多さん。ええか、弔辞を言うで。聞いてるか！」
「聞いてまんがな」と、満面の笑顔で言う君の声を、もう、この世では聞けないと思えば、世の中のこまごましたことなんか、もうどうでもいいと思う。

よく議論したなー。
よく言い合いしたなー。
よく仲直りしたなー。

俺の人生で、いちばん多く言い合いをしていちばん多く仲直りした男だった。
俺の事務所が3階で、君の事務所が4階だった時期は、毎日のことだった。

十一年間、毎月一日に更新し、百三十号を迎えた「うらがみ忠文」ホームページは、俺がメールで原稿を送り、それを君が整理して作ってくれていた。
月末になると、俺の写真を撮りに来る。
すぐにデジカメの画面を見る。俺は顔が気に入らない。
「もっと、ちゃんと撮らんかい」
「こんな顔ですって」
「そんなことあるかい」
「あるんですって」
それから、「まあまあ」と、酒盛りになる。
君ほど美味しそうに嬉しそうにお酒を飲む人を見たことがない。
君は、素敵なおじさんだった。おじさんどうだったけど、気持ちちは、仲良しで純情な高校生どうしのようなだった。

大手のコンピューター会社から独立して、パソコンを使ったベンチャーを立ち上げた君は、俺のパソコンの先生だった。

動かなくなったパソコンには、誰もがイライラする。
ところが君は、飄々として「手をパンパン叩いてお願いしたら動いたりもするもんなんでっせ」と言ったことがあった。
やってみたら本当に動き出した。
パソコンにも神様がいる！と君は教えてくれた。
パソコンを器械としてではなく、思いやりを持って接していた人だった。

「思いやり」は、君のキーワードだ。
言葉に気品があった。行動は、親切そのものだった。

家庭菜園で採れたきゅうりを届けてくれたり、奥様の音楽で人を癒す仕事の話をする時の君は、本当に嬉しそうだった。

かわいらしいところもあった。
去年の秋、奥様とヨーロッパにオペラを観る旅に行かれ、その感想話に来た夜。
寒い夜だったので、俺は竹輪、厚揚げ、こんにゃくでおでんを用意していた。肝臓を患い油物に弱い君のメニューを考えるのが俺の楽しみだった。
「うまい、うまい」と食べながら、顔を上げて「玉子はありまへんのか」と、あどけない顔で尋ねた君の顔を、俺は忘れられない。
今度、用意しておくよ！

昨日の朝、八時前、奥様から知らせがあった。
すぐに病院へ走った。
ふだんからインドの哲学者のような顔やなー、と言っていたけど、こんな顔やったかなーと改めて思うほど慈愛に満ち溢れた、ほれほれするほど美しい顔やった。
肩を抱いた。
世の中にこんなに温かいものがあるかと思うほど温かだった。
ご息さんが側におられたので泣かなかったけど、おられなければ抱きしめて思いきり泣きたかった。

今度、何時、ヘルメットをかぶって飄々とバイクに乗ってやって来てくれるんや・・・！

あの地震後、神戸復興塾という勉強会で知り合ってから、十五年。
喜多さん。君のあらゆる行動と言葉に、感謝をしてもし切れない、俺は人間に生まれて、君と出会えたことを喜ぶ。

弔辞を筆で書こうと奉書紙を買ってきて、墨もすったけど、手が震えて文章が書けない。
そうだ、君ならパソコンからのアウトプットの紙で許してくれるだろう。

「そんなこと、どうでもよろしいがな」という君の声を心で聞いて、名残つきない惜別の言葉を終わりにします。

ありがとうございました、喜多さん。
安らかに！待っててや。

平成二十三年三月三日

友人代表
神戸市議員 浦上忠文

神戸復興塾塾生の喜多陽太郎氏が 2011 年 3 月 2 日、ご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

まち研ニュース 19号

災害と想定外

小林 郁雄（神戸まちづくり研究所理事長） <ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp>

2011年3月11日の東日本大震災以後、「想定外」とか「未曾有」という言葉が飛び交っている。確かに、これほどの大津波への対応や、原発全電源喪失という事態になるという想定はしていなかった、ということだろう。

しかし、災害というものは、もとより「想定外」な事態が起こることによって生まれる被害である。想定した範囲内の現象が起こって、人命などの被害が生じたなら、それは災害ではなく怠慢というべきであろう。

防災・減災の対策は災害規模とその被害想定から始まり、どこまでそれに応じた用意をするかである。想定内であれば災害とはならない。簡単な例として、津波でいえば5mの想定で堤防をつくれれば5mの津波では災害とならない。5mを超える想定外の津波が来れば災害となる。もちろん堤防を越えても人家や農地など無い場所（そんなところには堤防はつくらないが）や、高台の集落などでは津波災害は生じない。

だから、想定外ということで、このような未曾有な災害への対策が不首尾である言い訳にはならない。というより、災害対策というのは想定外な事態（それが災害なのだから）への対策が基本である。想定外の津波が来たときにどうすればいいのか？起こるはずのない全電源喪失の時にどう対応すべきか？危機管理といってもいい。

事前対策は想定に応じて進められる（べき）ものである。20mの津波が想定されるなら（現実に目撃したのだから今後想定するまでもないが）、20mの堤防をつくって防ぐか、宮古市田老のような10mを超える堤防は経済的にも生活活動の上でも非現実的であれば、地盤標高を上げるか、高所への避難を前提にした対策を講じるのが防災である。しかし、それでもいつかは30m、40mの津波がやってくる。

その時どうするかが、本当の防災である。

防災関係の専門家などが「想定外」の事態なのでというのであれば、それは「私は想像力がありませんで」と言ってるに過ぎない。

自然災害である地震津波はどれだけ大きな被害でも、住民は耐えていつか復興できると思うが、原発事故はそうはいかないだろう、最大の復興課題が残るのはフクシマである。原発推進してきた連中がすべきことで、知ったことではないという気はするが、電気需用者のひとりとして、被害者の一刻も早い生活回復への支援をしたい。しかし、私の専門とする市民まちづくりができることは、ほとんど無いという気もするのだが。

岩手、宮城および原発以外の福島の津波被災地において、若い地域復興支援員が地域に根ざして3年は支援活動ができるような形になれば、フクシマで現地に密着した活動をするのは、60歳以上の年寄りが率先すべきであると、考えている。

いずれにせよ、地震津波自然災害被災地での地域復興と、原子力発電所事故被災地での地域再生は、全く違うものであり、同じような形での避難所、応急仮設住宅、災害復興住宅などの対応ではいけないし、ましてや復興構想会議などで、地域復興を一緒に議論すべきものではないと思う。（110440記）



岩手県宮古市田老（110410撮影）